

自己覚知や対人感受性の養成を目的とした 社会福祉援助技術演習プログラムの開発*

—神戸市社会福祉協議会市民福祉大学ヒューマンサービスコース初級プログラムの開発—

川 島 恵 美**

はじめに

人と人とのかかわりを媒介としてすすめられる対人援助場面において援助者がクライアントを受けとめる時、援助者は自分自身の自己を活用する。そのためには、援助における自分の反応と、自分の行為が他者にどのような影響を与えているのかを積極的に観察し、理解しておく必要がある。ハミルトン (Hamilton, 1951) やバイスティック (Biestek, 1957) の援助技術論の中でも、クライアントを受けとめる上での障害となるもののほとんどは、援助者の自己覚知の欠如に由来すると繰り返し述べられている。コンプトンとギャラウェイ (Compton & Galaway, 1979) も、自分自身に対する愛情、尊敬、信頼といった感覚を基礎として、初めて他者に対する同種の感情が持てると述べている。また、自己覚知のためには、より深く自分をとらえると同時に、自己を客観的に観察できる能力が併せて必要であり、このような自己の主體的・客體的な理解があって、援助の中での柔軟性やユーモアのセンスや勇気が生かされ、そして自己の限界を受け入れることも可能になると述べている。いわば対人援助技術とは、「相手に働きかける技術」というよりは「自分に働きかける技術」であり、まずは自分に働きかけて相手や援助に対する防衛や構え、先入観や意気込みを自覚し、そこからできるだけ自由になる必要がある (尾崎, 1997)。

社会福祉士受験のための認定カリキュラムが整備されるにつれて、社会福祉援助技術教育の現場では、対人援助の理論やスキルに関する技法教育

の比重が増して来ている。しかしながら、限られた時間やカリキュラム上の制限の中で演習担当者が願うことは、ノウハウやスキルの訓練はさることながら、それ以上に人間存在の尊厳に対する援助者の価値観や信条を明確にし、対人感受性を高め、援助者としての態度を磨くことにある。

筆者は、1994年より社会福祉士受験資格取得という枠のない環境の下で、自己覚知や対人感受性の深化を目的とする実験的なカリキュラムの開発プロジェクトに参加してきた。本稿では、そのカリキュラム開発の過程と内容、現在までの課題について述べ、社会福祉援助技術演習におけるカリキュラムへの応用可能性について考察する。

I 神戸市社会福祉協議会市民福祉大学 ヒューマンサービスコース初級プログラムについて

1. ヒューマンサービスコースの趣旨・目的

神戸市社会福祉協議会では、市民から現業の職員までを対象とした研修・福祉教育活動を進めるための事業を一括して「市民福祉大学」という名称で設置している。この中でヒューマンサービスコースは、福祉的対人援助の理解とその技法の習得を通じて、地域で展開される福祉サービスを様々なレベルで担うより質の高いマンパワーを養成することを目的として計画されたものである。様々なレベルとは市民のボランティアな活動から福祉従事者の仕事としての活動までを指す。いわば市民から専門職者に至るまでを包括し、主体的で自立度の高い市民層を厚くすることが、ひいては豊かな福祉社会へつながるという思いがこの

*キーワード：自己覚知、体験学習プログラム、社会福祉援助技術演習

**関西学院大学社会学部兼任講師